

用水不足

2月

野菜

1 露地野菜

- 1) 結球期を迎えている冬レタスは、水源が確保できる場合、畝間かん水を行う。
水源の確保が困難な場合は、10aあたり1t程度の水を確保して、株間にかん注器を用いて用水かん注を行う。
用水かん注ができない場合は、晴天の午前中にトンネル内のレタスの葉上に動噴で散水して、結球を肥大させる。
- 2) ニンニクとタマネギは追肥を施しても、水分がないと肥効が現れない。
これらの野菜は、今の時期が花芽分化にあたるため、肥切れにより「とう立ち」や二次成長の原因になるので、極力かん水に努める。
水源確保ができない場合は、追肥した肥料が隠れる程度の土入れを行い、肥料の分解を進める。
- 3) 収穫期を迎えているブロッコリーとナバナは、肥効の極端な低下により商品価値を失うおそれがあるので、葉色が薄くなっている場合は、速効性の肥料の追肥とかん水を行う。
- 4) 定植時期を迎えている春レタスや春ブロッコリーは、定植直後のかん水は最低限実施する。
これから定植する場合、早めに畝立て整地後、降雨を待ってマルチ被覆を行い、定植までに肥効が発現できるようにするため、早めの作業計画に変更する。

2 施設野菜

- 1) 少雨乾燥下では施設内も低湿度になったり、培地が例年以上に水分値が低くなったりしているので、作物体の状態を常に注意し、かん水をこまめに行う等の管理が必要である。
- 2) 施設内が乾燥すると、ナス・キュウリなどでは比較的低温度を好む「うどんこ病」が発生するおそれがあるので適宜防除する。
- 3) イチゴでは乾燥状態が続くと、ハダニ類の発生が多くなるので適期防除を行う。
ハダニ類の防除薬剤は作期中に1回しか使用できないものもあるので、使用薬剤の選定に注意する。
- 4) トマトの土耕栽培では培地が乾燥すると「尻腐病」の発生が心配されるので、カルシウムを含む微量要素肥料の葉面散布を行う。
- 5) 養液栽培で原水を上水道にしている施設では、上水道の減圧や時間給水などの情報に常に注意して予備タンクを準備するなど原水確保に努める。

茶

寒干害への対策

長期間の乾燥や寒風は、葉を萎凋させ最悪の場合枯死するという、いわゆる青枯れを引き起こすことがあるので下記の事前対策を行う。

- 1) マシン油により蒸散を抑制する。
- 2) かん水する。ただし、天候が和らぐことが分かっていることが前提。例えば、寒気が近づくことが分かっている場合は、逆に被害が出る恐れがあるので行わない。また、かん水により生育が早まり凍霜害を受けやすくなる可能性もあるため、かん水を行う茶園は凍霜害対策には万全を期すること。
- 3) 冬季間（～3月中旬）、遮光率60%程度の被覆資材で被覆する。直掛けよりトンネル掛けがよい。

果 樹・オリーブ

1 露地栽培

1) この時期の樹体は、土壤乾燥と大気中の乾燥により、地下部と地上部ともにストレスを強く受けているので、可能な限りのかん水や防風対策に心掛け、樹体へのストレスが軽減するように努める。

特に、苗木や樹上着果のある甘夏やポンカン系統（不知火等）は、乾燥しないように注意する。

2) 確保できる水量が不十分であれば、細根が多く分布している部分へ集中的にかん水を実施するか、土壤表層に溝を掘り、その部分にかん水する。

特に、ドリップチューブを用いた点滴かん水法は効果的である。

3) 乾燥状態が続くようであれば、定期的なかん水を継続して行う。

除草を兼ねて管理機で地表面を軽く中耕しておくこと、土壤を膨軟にして通気性が良くなる。

4) 春肥は降雨後、またはかん水実施後に施用する。

2 施設栽培

柑橘、ブドウでは発芽、新梢生育不良を避けるため、可能な限りかん水する。ただし、開花期間中を除く。

花 き

冬期の渇水は晴天が多い裏返しであり、花を咲かせる種類の花きにとっては日照不足の心配がなく、水不足を除けば、好条件につながる。

低温時期のため、蒸散作用は緩慢であるが、それでも最低必要量の用水を供給しないと生育に支障をきたすので、以下の対策を行う。

1 露地・施設栽培共通

1) 節水する場合は、1回のかん水量は根域に十分水が行き渡るような水量とし、回数を減らして実施する。

2) 栄養生長期の水不足は生育に大きく影響するが、収穫間近になれば影響は小さいため、生育ステージによって節水量を加減する。

3) マルチを行うなどして土壤からの水分の蒸発を防ぐ。

4) 水源確保ができない場合は、追肥した肥料が隠れる程度の土入れを行い、肥料の分解を進める。葉色が薄くなっている場合は、薄めの液肥を与える。

2 施設栽培

蒸発・蒸散抑制のための施設の密閉は、品質低下につながるので行わない。施設内が乾燥すると、比較的低温度を好む「うどんこ病」が発生するおそれがある。また、ハダニ類の発生も多くなるので適期防除を行う。

畜 産

1 十分な飲料水の確保

減圧による給水制限を想定して、必要であれば貯水タンクを準備するとともに、節水対策として飲水器からのこぼれ水等を防止する。

2 管理水等の減量

1) 畜舎や施設を洗浄する場合は、消毒の効果に支障をきたさない範囲で、水洗に用いる水量を最小限に抑える。

2) 水洗を行う前に散水や洗浄剤の散布を行い、汚れのひどいところはブラシ等で擦り洗うことによって節水する。

3) 消毒液を調製する場合は、薬剤の容器に記載されている用法・用量、使用上の注意をよく読み、適正な希釈倍率にする。